〈青森県史〉の窓 202

江戸から来た穴太衆
～弘前築城後の動向～

福井　敏隆
（元青森県史編さん専門委員）

半年も前になってしまったが1月19日に発表された第166回直木賞は、今村翔吾氏の『塞王の楯』と米澤穂信氏の『黒牢城』のダブル受賞となった。

『塞王の楯』は、戦国時代に多くの城の石垣を築いた穴太衆の一人である飛田匡介と、鉄砲製作と鉄砲隊の組織集団国友衆を率いた国友彦九郎が、京極高次の東軍3千人が籠もる居城大津城（滋賀県大津市）の攻防を巡って「最強の楯」と「至高の矛」として対決をしたことを描いた作品である。

攻防が長引いた事により、毛利元康が大将を務め、立花宗茂が先鋒を担った西軍1万5千人の軍勢は、1600（慶長5）年9月15日の関ヶ原の戦いに間に合わず、西軍敗北の遠因となった。穴太（大津市坂本穴太）も国友（長浜市国友町）も近江国（滋賀県）の地名である。

それでは1606（慶長11）年に完成した、弘前城の本丸石垣を築いたのは誰なのか？史料はないが、積み方から見て穴太衆であったことは間違いない。

山城（森忠政が1603（慶長8）年に築城し始め1616（元和2）年に完成・現津山市）にも見られた。

本丸石垣の解体修理が必要になったのは、1699（元禄12）年に築き直した「築き掛け」の部分に膨らみが生じ、崩落の危険性が高まったためである。築き直しの時にも穴太衆が参加していたのだろうか？弘前藩の記録である「国日記」の記述には、工事の始まった1694（元禄7）年6月14日と7月6日に「石切頭長右衛門」の名前が見える。

これに先立つ1672（寛文12）年の「国日記」には「あのう長右衛門」の名前が3箇所出てくる。5月23日条には、曹洞宗の耕春院（現宗徳寺の前身）が無縫塔に文字（戒名）を刻むのを、あの長右衛門に願いたいと申し出て許可になった記事が書かれている。

29日条には、長勝寺で仙洞院（初代藩主津軽為信正室）の廟（環月台）に無縫塔が安置され、戒名は江戸から下ったあなう長右衛門が刻んだという記事が出てくる。この無縫塔が現存する仙洞院の再興墓石である。

6月16日条には、「先立之橋」（先達淵の橋？）の工事を、あのう長右衛門に命じた記事が出てくる。長右衛門は江戸にいたようで、弘前に呼び寄せられて石工の仕事を命じられている。この長右衛門が「石切頭長右衛門」を指すと思われる。

2017（平成29）年度から始まった本丸石垣の解体工事は、本丸東側の2185石を解体した。このうち1107石を昨年度から積み直すことになり、去年は約3割を積み戻した。今年もその作業が始まっている。石積み業者には滋賀県大津市の「株式会社穴太」が含まれており、現在でも穴太衆が石垣工事を担当しているのである。

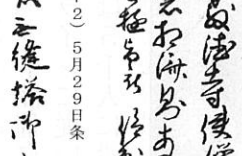
なお、寛文年間の「国日記」に穴太衆の記述を見つけて筆者に教えてくれたのは、元弘前市公園緑地課課長補佐の小嶋修造氏である。特に記して感謝申し上げたい。

しかし1645（正保2）年の「津軽弘前城之絵図」では、本丸東側の内堀に面した部分38間（約70m程）は「築き掛け」とある。完成と見なしたのは、本丸の南西隅に五層の天主閣があり、城は西を正面として意識していたため、東側の石垣未完成には目をつむったように思える。

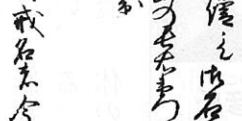
こういう事例は他にもあり、美作国（岡山県）の津

○「国日記」に見える「あのう長右衛門」の記事

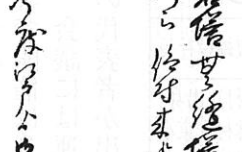
1　寛文12年（1672）5月23日条



2　寛文12年（1672）5月29日条



3　寛文12年（1672）6月16日条



「国日記」に掲載された「あのう長右衛門」に関する3つの記事
＝1672（寛文12）年5月と6月の記事より抜粋

東京と青森 651号
東京青森人会 2022年7月